

ロンドン大学のアーキビスト課程で奮闘中

三好祥子

今年のイギリスは例年にない寒さだとかで、ロンドンも24年ぶりに11月に雪が積もるという事態に見舞われました。私の住んでいる大学の寮の部屋は備え付けのセントラルヒーティングがマイルドすぎて殆ど役に立たず、追加の電気代をとられることを承知のうえでもう一方のヒーターをも使用し、更にひざ掛けにくるまって勉強しています。

日本史を学んだのみで、文書館へ勤めた経験がないにもかかわらず、イギリスで史料管理学を学ぶという無鉄砲な計画をたて、ロンドンへ来てしまいました。

University College London の School of Library, Archive and Information Studies (図書館文書館情報学大学院) に籍をおき、MA in Overseas Records Management and Archive Administration (国際記録管理史料管理修士課程) を専攻しているというのが現在の私の立場です。どれもこれも余りに長いので通常はUCL、SLAIS、ORMAA と略されています。何だか妙ですが、便宜上、以下この表記で通したいと思います。

このコースには1986年に国立史料館の安藤正人氏が籍を置かれ、既に多くを紹介されていますので(『アーキビスト』13号など)、重複を避けつつ、今年から大幅に変わったというカリキュラムについてお伝えしたいと思います。

(1) 教科

コース編成は以下のようになっています。

- 0 オートメーション入門
- 1 文書館運営
- 2 レコードマネジメント
- 3 検索手段作成
- 4 ガイド作成
- 5 行政史 及び 史料学

すべて必修で選択はなく、既に5月分まで時間毎に細かく決められています。カリキュラムは、コースの名前からわかるようにレコードマネ

ジメント(RM)と史料管理(AA)とを不可分のものと考えて、双方を学ばせようという意図で設計されています。

これは、①アーキビストとして教育されて就職した人の殆どが現実にはRMも行なわざるを得ないということ、②記録のライフサイクルという視点で考えるとき、最終的に質の高いアーカイブズを得るには、現用段階から将来の評価を見越してきちんと管理されねばならない、という主に二つの理由に基づいています。従って、第1学期は、記録の作成から始めてひたすらRMについて学び、第2学期以降AAについて学ぶというシステムになっています。

11月末現在、現用段階を終えて半現用、非現用へと授業の主眼が移ってきました。現用を習っているときは4人毎のグループに分かれている。いろいろな組織のregistry(現用記録管理部、文書課?)を訪問し、先日は、レコードセンター(模範的なもの1件、問題を抱えているもの1件)へも見学に行きました。

いずれも見学後に徹底して長所短所が話し合われ、どのように問題点を解決すればよいかということを実に具体的に討論します。批判して終わるのは簡単ですが、「ぐちゃぐちゃで職員すらどこに何があるのかわかっていない」と皆がさんざん悪口を言ったところも、必ずその長所は何か、と聞かれ、「ぐちゃぐちゃだが、ともかく記録が移管されてくる」という風に考えるよう教えられます。これは非常に現実的な学習方法ではないでしょうか。今後は、評価選択も見学することになっており、その後待ちに待った冬休みをはさんで、AAの分野へ入ります。

1、3、4はまだ全く手つかずですので何ともいえませんが、パブリックレコードオフィスでの検索手段作成実習が中心になるということです。

以上の大きな流れの授業はHome Studentsと呼ばれるイギリス人学生たちと一緒にですが、

他方で実際に扱う史料は彼らと ORMAA では異なるため、分かれての授業があります。5の科目です。

基本的に ORMAA は英連邦の学生を対象に設計されていますから、行政史は大英帝国の植民地支配の話でした。先生方は私のことを気にかけて下さり、代わりに他所で日本の行政史を学んでどうかと提案して下さいましたが、近代外交史を専攻していた私にとってはむしろイギリスの対外政策がうかがわれて、興味深いものでした。

史料学は、イギリス所在の自国関係文書を把握するとともに、オーラルヒストリーや映像記録、写真の目録といった分野も議論されています。

0のコンピューター入門ですが、これは図書館学・情報学の学生も一緒にの講義です。ただ、コンピューターの専門的な話ばかりでちんぷんかんぷん、現実の応用の話も図書館の話が少し出る程度で、正直なところアーキヴィストに役に立つという感じではありません。そして唯一成績評価されない科目ということもあって、エッセーに少しでも時間をかけたい私達としてはついついさばりがちです…。具体的に RM や AA でのコンピューター利用の可能性などを探ってもらえばもっと興味を持つと思うのですが。

コンピューターに関しては、特に現用から半現用段階では普及していますから、見学の折など素晴らしい検索システムを見て感動したりしますが、結局のところ、マニュアル段階での記録が整理・管理されていないければ、コンピューターの導入も用をなさないということも改めて考えさせられました。見学に行った2件のレコードセンターで、一方は「整理の済んだものはすべて入力されている」と胸を張っていましたが、問題は整理されていない記録の山でしたし、他方のレコードセンターでは「マニュアルが作動しているからコンピューターはいらないのだ」と胸を張っていました。

以上の他に不定期に Seminar on Home Situations として、自国の状況を話し合い、各の問題を具体的に解決することをめざすセミナーが

ORMAA の学生対象に開かれます。理論だけ学んで帰国してもしばしば役に立たないという問題をふまえて、基本の RM や AA をふまえたうえで解決策が練られます。

非常にインフォーマルなものですが、実は私はこれが一番肩身が狭く、何の職場経験もないことが、私の理解だけでなく、日本の事情を理解してもらおううえでもネックとなっています。はじめに各自の勤務先を中心に文書館事情を紹介しあったのですが、私は昨年夏の史料管理学研修会の際集めたパンフレットを回覧し、国・県・市レベルでの事情を報告しましたが、形だけの報告となってしまい、とても残念でした。

さて、成績評価は、0とセミナーを除き、すべてエッセーでなされます。これは語学にハンディのある留学生の立場を考慮して、今年から試験がすべて廃止されたためです。とはいっても楽になるということは全くなく、恒常的に1~2本のエッセーを抱えている状態ですので、年度末は多少楽でしょうが、今は慢性的睡眠不足のうえ気の休まる暇がありません。寮の友人たちに同情されつつ週末も部屋にこもっています。

エッセーのテーマは非常に現実的に設定されます。RM では将来現実につかると思われる問題をとくという形ですし、行政史では現実手にする自国史料の背景を理解するために植民省などの組織の変遷をまとめるよう設定されました。物理的に大変でも、必ず役に立つと思えるので、学生のやる気もおきるというものです。特に5のエッセーの蓄積で、毎年多くの留学生を出しているアフリカ諸国やマレーシア関係史料の所在などが明らかになってきており、いずれまとめて出版できるといいますが、というサーストン先生のお話もありました。

(2) スタッフ

講師陣は、特に RM の科目で毎回様々な職場からレコードマネージャー等が講義にみえますが、それらのアレンジも含めてアーカイヴズの学生全体の責任者はエリザベス・シェパード先生という若い女性です。エセックス州立文書

館などで働いた経験を持ち、昨年から SLAIS へ 移りました。彼女自身このコースの出身で、コースを現場のニーズに対応させることに貢献しています。RM の言論の講義やエッセーの評価など、とても忙しそうです。他には、SLAIS 全体の留学生担当者、及び史料学担当としてジョン・マキルウェイン先生、ORMAA の責任者としてアン・サーストン先生となっています。後者お二人は既に日本でもお馴染みの方々だと思います。

さて、サーストン先生はアフリカをとびまわって忙しすぎるため、もともとウェールズ大学で教えていて今年からロンドンに移られたクレア・ライダー先生が代わりに面倒をみて下さっています。ライダー先生も若い女性で、話し方もとても気さくで、シェパード先生ともども、私にとっては何かと話しやすく助かっています。現在はライダー先生にはあまり会いませんが、来学期以降は殆どの授業を受けもたれるようです。

他には、ホームステューデント向けの史料学を担当されているジェイン・セイヤーズ先生、オートメーション担当のアンドリュー・ドーソン先生、マネージメント一般担当のヘレン・ブッチャー先生、ファイルの表題の統一について講義されているアイア・マキルウェイン先生が SLAIS の専任で私達になじみのある方々ですが、顔触れから受ける印象は RM を始めとして、記録にとどまらない、組織運営・管理にまで目をむけた教育、という感じです。少なくともシェパード先生は昨年、ライダー先生とドーソン先生は今年からの就任で、この1、2年でイギリスでもだいぶアーキヴィスト教育は変わりつつあるのかもしれないと思います。(確たる根拠があるわけではありませんので、念のため。)

(3) 友人たち

現在 ORMAA に在籍しているのは、ガーナ人男性4人(アニング、アド、アルフェウス、クレメント)、マレーシア人女性3人(マハニ、ノル、マーガレット)、タンザニア女性1人(エリザベス)と私です。アニング、アルフェ

ウス、マハニ、ノルはそれぞれ国立公文書館勤務、マーガレットはサバ州立文書館勤務、アドとクレメントは政府のマネージメント・サービス部に属し、RM を扱っています。エリザベスは会計検査官及び会計士の試験を扱う組織で働いており、現用記録を扱う立場です。彼女は一学期の予定で派遣されてきており、それを延ばそうと、今試みています。

このように年令も経験も英語も大先輩の人々に囲まれ、私はスクールガールと言われてかわいがられているという情けない状況です。セミナーの折など議論が白熱してくると、特に男性4人はいっせいに勝手に主張を始めるので、私は呆然となってしまいますが、授業のあと一人をつかまえて「さっきは何を話していたのか」と聞くと丁寧に教えてくれて、「ガーナ人はしゃべりすぎる」と自分で笑って私をなぐさめてくれます。皆とても親切で、何の貢献もできない自分がもどかしいです。

はじめは少し距離のあったホームステューデントたちとも徐々に親しくなり、現在クリスマスパーティーを計画中です。ホームステューデントにもかなり職場経験のある人が多く、折にふれて講義の最中にもそれらの経験にもとづく話が披露され、勉強になります。

これら様々な経験にもとづく話を聞くと、万国共通の問題に気づく反面、国が違うと具体的に抱えている問題も違うということも認識されます。日本は遅れている、とこちらでも言われましたが、そのひとことで片付けられるのではなく、もっと日本が他の国と違う点、それゆえの問題点や逆に長所は何かということを伝えられればと思います。エリザベスのように、現場で問題を抱えた人が短期間でも参加するのは大歓迎とのことで、他にも3週間だけインドのビジネスアーキヴィストも来ています。日本からの参加者も増えることをねがいつつ、筆をおくことにします。

(※三好さんはお茶の水女子大学大学院修士課程修了後、1年間にわたりUCLに留学中です。)